

東北の基層文化論：縄文とエミシ

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2：モノが語る人類誌]⑧

2025 年 11 月 22 日

講座要旨

今年度の館長講座は、「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆様とご一緒に巡る旅をしています。考古学と歴史の分野を中心に、海外のミュージアムを訪ねつつ、世界史の流れを東北地方と関連させて考えてきました。今回は、最終回「⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ」です。この連続講座では、これまでに私が調査研究を行ってきた地域の海外博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れてきました。今年も、お話の中で旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全 24 回の内容と関連させつつ、参照しました。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要を公開しております。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

今年の全体テーマとしては、「時代区分」の意味を考えてきました。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探ってきました。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出ている気持ちでお話を続けてきました。

今回は、大きな時代の変化にもかかわらず、私たちの郷土である東北地方が、長い年月をかけて育んできた、「東北らしさ」について考えてみます。とりわけ、縄文時代は東北にとって、重要な時代であると思います。講座では、東北地方の亀ヶ岡文化などを取り上げて、「東北の独自性」とはどのようなものなのか、考えてみようと思います。なりわい、暮らし、工芸などの、さまざまな面は、どのようにその後、たとえばエミシの時代に、またそのあとに、脈々と受け継がれてきたのでしょうか。

前回、前々回と、考古学と民族学の融合分野である「民族考古学」(Ethno-archaeology)の成果を参照しながら、東北の旧石器時代、縄文時代について考えました。民族考古学の提唱者であるルイス・ビンフォード氏は、静止した考古学資料から、動態である文化復元に向かうための「ミドルレンジセオリー」を主張して、民族考古学の意義を論じました。いわば全地球の人類の経験の総和として、民族誌の集成から法則性の把握へと向かう「辞書作りに

あたる」方向を提起したのです。東北地方の縄文社会を考察するにあたって、民族考古学の有効性とはどのようなもののでしょうか。参考となるのは、「複雑狩猟採集民」Complex hunter gatherers としてまとめられる人々です。長期的な定住集落を構成し、大きな社会統合を有し、広い交易圏があり、階層分化も認められるような社会です。前回は、北米の北西海岸、狩猟採集漁撈民の民族誌について紹介しました。バンクーバー周辺の諸民族たとえば、ハイダ族、トリングット族、クワキウトル族、海岸セイリッシュ諸族などです。定住している集落には氏族の記念碑であるトーテム・ポールが立ち、秋に河を遡ってくるサケ類の大群を集約的に捕獲し、燻製などの加工処理を施し、保存食料として端境期に備えます。周囲の環境から安定した食料資源を確保して、高度な文化を保持してきました。

縄文文化は東北地方で大きな繁栄をみました。「東高西低」といわれる如く、西日本に比較しての文化の高揚に、その要因として豊富な遡河魚類資源をあげる学説がありました。1960年代に山内清男氏が提唱した学説で「サケ・マス論」といわれ、賛否両論がありました。遺跡の発掘調査でサケ・マスが出土しないという「現象面の反論」が有力でした。しかし貝塚調査の手法である「フルイによる水洗選別」、また調査遺跡の増大により、サケ・マスは重要食料資源であったことが実証されました。トチなど堅果類の高度利用、非常に発達した芸術的な土器文化、ヒスイなど広域の物資流通、シャーマンの存在、遮光器土偶はじめ複雑な精神文化、多様な植物性編組製品、洗練されたウルシ工芸技術など、「複雑狩猟・採集・漁撈・栽培民」としての縄文人の姿は、世界の狩猟採集民の中でも特筆されます。その一端は、当館夏の特別展「世界遺産 縄文」にてご紹介しましたところです。多数のご来場有難うございました。

さて、東北らしさという場合ですが、独自性とは共通性と対照させることで分かるという、文化圏を考える基本原則があります。そこで考古学的に、旧石器時代から時代区分に沿って、東北独自の文化圏という観点で考えてみます。弧状と表現される日本列島では、くの字の折れ曲がり部分の西と北とで、大きな文化の差が、何度も現われます。縄文時代の西日本と東日本、東日本の中での中部高地、関東沿岸、東北は、それぞれに各時期の特質を見せます。東北地方の内部でも、北東北と南東北との差は、しばしば現れます。このような大きな傾向は、農耕文化確立の弥生時代、国家形成の古墳時代、その後の古代律令制社会、そしてエミシとの抗争時代から、武士の台頭まで、かなり頻繁に見えるところです。私は「東北の内なる境界」という表現で考えています。原始から近代までの、今年度の通年テーマ「時代区分」の社会変動を通して、いわば「風土の違い」の繊細さが、繰り返し現れる、これはどういうことなのでしょう。歴史学での「基層文化論」という考え方が手掛かりになると考えます。人々の生活様式と経済的生産（および分配）の構造が変遷をたどる中で、新たな文化層、社会的複雑さの要素が付け加わっていく、その基層にある自然と人間集団との共生の在り方、村落社会の構造、地域それぞれの有力者層の継続など、時代区分の転換の中で、変わらぬ地域の特質、また生活の伝承文化など、数千年単位での継続性があると理解されますが、これまでの歴史学理論では必ずしも十分に評価されてこなかったようです。さらに

「時代区分」「風土」すなわち時間と空間および社会の構造を超えて、「人間のやることは、あまり変わらない」という「ホモ・サピエンス」の普遍的共通性はもっとも大きな背景でしょう。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

・今年度の館長講座は「モノが語る人類誌」と題して、海外の博物館の歴史・考古学展示を訪ねる一方で、東北地方の歴史とも比較をしながら、世界の歴史の大きな流れについて、理解を深めていくことを目指しました。そして「時代区分とはいったい何でしょうか」という課題を、通年のテーマとして考えてきました。最終回では、前々回、前回に引き続き「現在の資料」（諸民族の生活誌、民族誌：エスノグラフィー）から、原始の時代を考察するという研究動向（民族考古学）を踏まえて、縄文時代の文化・社会を見直してみることで、改めて「東北らしさ」とは何だろうか考えてみましょう。

・6・7・8回の「お題」を整理してみます。かつて「未開社会」と言われてきた多くの伝統的文化を保持する社会は、民族学によって研究されてきました。狩猟採集という生業経済を保持してきた多くの文化の民族誌研究から、比較研究によって明らかにされてきた文化の共通性と変異を考えました。そして、同じ狩猟採集という生業経済であった、はるかなる昔の「旧石器時代」の文化の性格を、「フォレイジャー型」と「コレクター型」というモデルで考えました。館長は『東北歴史博物館研究紀要』（2023、2024）で、東北地方の後期旧石器時代人の文化についての考察を行ないましたので、遺跡の事例をあげながら、解説しました。また縄文文化は、定住化の進行と確立という脈絡で考察されて、「北海道・北東北の縄文遺跡群」として整理され、世界遺産に登録されました。一方、民族誌学では、「複雑狩猟採集民」としてまとめられる、定住狩猟採集漁撈民の文化も、移動する諸民族と並んで研究されてきました。前回は北アメリカの「北西海岸狩猟採集漁撈民」の事例（米国とカナダ）を紹介して考えてみました。このような「民族考古学」と呼ばれる分野は、日本の考古学では多くの批判も存在する研究方向ですが、大きな可能性も存在する分野です（館長学説）。最終回では、東北の縄文文化を見直すとともに、「エミシ」と呼ばれた人々の時代を経て、現在に至る「東北の風土」としての基層文化について、試論的に考えてみます。東北とは何か、東北らしさとは何か、東北の歴史の特質とは何か、こういったテーマを考えるのは「終わりのない旅」のようです。今後も機会があれば、さらに引き続いて、ご一緒に考えていきたいと思います。

・「文化進化」「社会進化」をめぐるのは、モデル的に二つの考え方の系譜があります。ひとつは「発展段階論」といわれるもので、古代奴隷制社会、中世封建社会、近代資本主義社会のように、新たな仕組みが以前の仕組みに取って代わるという考え方です。歴史学理論の主流ともいえます。一方「基層文化論」は、以前の基盤的な仕組みの上に、新たな層が加わっ

て複雑化していくという考え方です。

・西洋史研究の泰斗、増田四郎先生は、重層的な歴史の発展について「バウムクーヘン説」を唱えました（増田四郎 1985 『ヨーロッパ中世の社会史』262頁）。スライドで説明しましょう。四つの輪は、内側から順に、家の経済、村または都市経済、領邦または国民経済、世界経済を表わします。前段階の要素を払拭して、次々と新段階に発展するなどということは、どこの社会にも見られないのではないかと、としています。ドイツやフランスの田舎では、まだまだその地域特産のものを大切にする気風が強いこと、パンの種類まで地方で決まっている、スプーンのデザインからコップに至るまでローカル・カラーが色濃く残り、土地の人たちはそれを守ることに誇りを感じていることなど説明されます。「基層文化」という考え方は、これに通じるところがあります。新たな時代が訪れても（時代区分が変化しても）、その土地の「風土」には脈々とした伝統が続くという歴史観でもあります。

・歴史学の一分野に「民俗学」（日本民俗学）があります。柳田国男、折口信夫、宮本常一の諸先生が体系化した分野です。民俗学にも、少し似た考え方があります。文化を担い伝える「常民」という概念（柳田）は、民俗学において発想された考え方でした。当館の秋季特別展「宮城に生きる民俗・暮らしを伝えるモノ語り」展（10月11日～12月21日）では、「大きな歴史」の背後にある「小さな日々の営み」という捉え方で説明をしています。近代日本150年の激動の歴史の中で、人びとが守り伝えてきた日々の生活を、宮城県内35市町村の民俗文化を通して考えました。

・基層文化とは、名もなき人々によって担われ、受け継がれていくものです。私たちが普通「歴史」として見る政治や事件を「大きな歴史」とするなら、暮らしの根底にあつて経済を成り立たせている生活様式やモノの考え方が、これにあたるでしょう。その土地に独特の「風土」という見方、また文化人類学に言うところの「カルチャー」概念の一部に通じるものがあります。これまでの歴史学では、「大きな歴史」が主な研究対象でしたが、民俗学・民族学・考古学などでは、むしろ「小さな日々の営み」の特徴を重視してきました。考古学の発掘で出てくる「竪穴住居跡」や「石の斧」を例に考えましょう。日々の暮らしに特に事件がなくとも、それは歴史を動かす重要な要素でした。

・フランスの歴史学に、20世紀前半に誕生し、1970年代以降には日本の歴史学にも大きな影響を与えた「アナール学派」があります。「新しい歴史学」とも称され、政治や事件よりも構造、地理的にとらえる基層文化の特質、長期的な生活史、気候変動と生活のような、従来の歴史学よりも幅広い課題を、総合的に追究してきました。以前に紹介したピレネー地方中世の異端審問記録の研究『モンタイユ』などがあり、やはり基層文化に重きを置いています。村人の持っていた世界観などにも触れることになります。

・（旧石器時代の東北について。省略します）。

・日本列島の植生と、縄文文化の東西の大きな文化圏の関係をみると、かなりの一致が見られます。西の「照葉樹林文化」に対して、東の「ナラ林文化」（落葉広葉樹林）が大きな違いです（植生図）。照葉樹林が支配的な植生となってきた縄文時代の早期～前期以降、東日

本と西日本の縄文文化は、大きく地方色がはっきりして、晩期まで継続します。そして、弥生前期の水稻耕作中心の文化は、伊勢湾付近までは速やかに拡大しますが、そこで一旦スローダウンして、やがて東北日本に至ります。縄文時代の北海道では、石狩低地帯の東と西とで、別の土器型式や文化内容が表れることが多くあります。縄文晩期には、亀ヶ岡文化圏の東日本に対して、凸帯文土器文化圏は、西日本に広がります。縄文早期では、沈線貝殻文土器文化（東日本）、に対して回転押型文土器文化（西日本）が広がっていました。関東の田戸下層式、田戸上層式、九州の早水台式などの例です。

- ・（亀ヶ岡文化について。省略します）。

- ・「縄文カレンダー」に見る基層文化。季節ごとに、縄文人がどのような生業活動に重点を置いていたか、一枚の図で説明する「縄文カレンダー」という考え方は一般的になりました。これは最初に、東松島市にある里浜貝塚で、貝層を細かく発掘して、明らかにしたものです。当館の前身「東北歴史資料館」による1970～80年代の研究がもとになっています。当館の常設展示にも詳しい説明があります。スライドは里浜貝塚西畑地点の発掘です（1978年）。写真は大学院生だった阿子島の撮影です。写っているのは宮城県教委の大先輩たちです。史跡の「貝層観察館」地点では、縄文人の生業活動の季節性が解明されました。縄文晩期の製塩土器、塩作りの道具も出土しました。

- ・環境に適応するだけではないのが縄文文化でした。周囲の自然に手を加えて、環境を巧みに活用し、「里山」「里海」というゾーンが、集落の周りに広く一般化していました。自然への「適応」から「共生」への転換です。縄文前期以降の定住生活の確立に伴う自然観の転換がありました。定住生活は、「思考」をも変えました。

- ・縄文晩期の文物は、古来、多くの人々が愛でるところでした。この台付き鉢（高坏形）は津軽藩の殿様が内面に漆を塗って金箔で仕上げた土器です。「変形工字文」（表面に線を彫って、漢字の「工」の文字に似ているモチーフを重ねる）が施文されています。東北大学所蔵です。現代の縄文ファンの皆さんのうち「工芸派」の推し？ ほかに「渦巻き派」（岡本太郎氏のように、中期の雄渾な土器が推し）、「女神派」（豊穡と女性を強調する土偶表現が推し）のファンがいらっしゃいます。（館長説）。亀ヶ岡文化には、奇怪な文物も多く出現しています（遮光器土偶）。石刀、独鈷石など呪術的といわれる遺物も多く存在します。縄文文化の行き詰まり・停滞性という考え方に対して、時間に余裕があり遊びを許容するゆとりを示すという考え方もあります。また西日本から波及してきた稲作農耕を、在地の縄文人のムラではどのように捉えていたか、考え方が分かれるところです。東北地方における縄文から弥生への変化の実態は、目下の重要な課題になっています。

- ・写真のように弥生初期の土器でも、縄文晩期の文様（変形工字文）、器形（台付き鉢、高坏）を受け継ぎます。東北地方では、弥生文化も縄文文化の伝統を強く保持して発展しました。集落の立地も、一変したりしなかったり多様です。宮城県蔵王町鍛冶沢遺跡、栗原市山王団遺跡、大崎市北小松遺跡のように、縄文晩期からの拠点のムラ（基幹集落）の継続するパターンがあります。北小松遺跡では、弥生時代前期に大洪水に見舞われて「水辺のムラ」

は、なくなりました。

・縄文時代、弥生時代、それぞれ日本列島内で非常に多様性に富んでいます。縄文時代の東日本、西日本は、大きく違いますが、同じ「縄文文化」としてひとまとめに括られています。教科書などもそうになっています。弥生時代についても、稲作農耕が伝来してから、北九州から西日本、そして東北地方まで、それぞれの地域で複雑な文化のプロセスがありました。しかし、より高度な文化の「光は西から」的な発想がまだ強く残っています。農耕集落が成立し、確立したとされる弥生時代中期にも、東北地方の内部で豊かな地域性があります。さらに、気候の寒冷化、農耕社会の継続的な発展をめぐっても、諸説あります。北方の続縄文文化が南下してくる弥生時代後期以降、社会発展の評価について、いろいろな考え方があります。いわば、発展史観、停滞史観、選択史観といえるでしょう。縄文時代後半の東北日本を中心の舞台にして考える歴史の筋道も、全国各地のそれぞれの時期、年代に、普遍的にあてはまるわけではありません。通説への疑問があります。「縄文の東高西低、弥生の西高東低」は、果たしてそうなのでしょうか？ むしろ、「東は東、西は西」ではないのでしょうか（館長）。

・東北古代史の見方において、「北からの視点」の重要性については強調しすぎるということはありません。あらためて日本古代史を再認識する必要があるでしょう。東アジアの文明史の中で、東北地方は独自の意義をもった地域でした。

・（東北地方主要古墳の編年。東北地方の北海道系土器の分布。黒曜石製のスクレイパー。石巻市新金沼遺跡での、土師器と続縄文土器（北海道系の土器）との共伴。栗原市入の沢遺跡（古墳時代前期）の防御性集落と火災住居、鏡などの出土品。宮城県での方形周溝墓の発見。名取市今熊野遺跡の大規模調査（1971～72年）。宮城県教委に文化財保護課の設置（1973年）。城柵官衙遺跡と宮城県北部の「防衛ライン」。「38年戦争」などの話題）。

・図は日本列島全体の、縄文前期と中期での大きな土器型式圏の広がりです。すでに1960年代に、このような土器型式の分布ゾーンが解明されていました。その後さらに縄文土器の型式編年は、精緻化、細分化の極みとなっています。東北地方では、岩手県と秋田県を横切って、南に大木式土器文化（七ヶ浜町大木圀貝塚が標識）、北に円筒式土器文化（三内丸山遺跡で有名）と分かれています。

・このあたりの南北文化の境界については、館長は「東北の内なる境界」とでも呼びたいラインです。北に南に上下しつつ、悠久な時を経る、時代区分の変化にもかかわらず、繰り返し歴史に表れてきます。縄文時代後期から晩期には一旦再広域化しますが、また現れます。弥生時代中期から後期になると、北からの文化の流れである続縄文文化が南下します。弥生後期東北の標識的な土器型式は「天王山式土器」（山の上に立地する白河市天王山（てんのうやま）遺跡出土、重要文化財に指定）です。その直後の土師器（古墳時代初め、宮城県では「塩釜式」と並べて、比較してみれば、いかに前者が縄文的な文化的系譜を引いている造形であるか、誰の目にも印象深いことです。古墳文化の北限はこの「内なる境界」の北側までは至りませんでした。律令制の成立期（すなわち日本国の範囲）では、南側で「評」が

設置された地域が境界でした。次いで律令国家の北への拡大についても、東北地方の南北の相異はきわだっています。古い学史になりますが、1991年に日本考古学協会の大会が、オープンしたばかりの仙台国際センターで開催されたとき、「北部日本の南北問題」として、学会での検討テーマにもなりました。

・東北地方の中での地域性は、日本列島の他の地域と比較していくと、さらに重層的に成り立っていることが知られます。もっと巨視的には、東日本と西日本との地域性となって、この違いは、約2万年以上も前の後期旧石器時代後半まで遡り、現在に至っているわけです。このような重層的に存在する、歴史的に長期にわたる地域性を、あるいは「風土」という言葉、概念の枠組みで考えていくのも、今後の大きな課題ではないでしょうか。

（講座では、過去39回のスライドから選択して、東北地方の基層文化論をめぐって、いわば総集編的に話をしました。常連のお客様はじめ熱心な皆さんを迎えて、話に熱が入り「延長戦」となりました。所定の時間を50分も超過しましたが、ほとんどの皆さんに終わりまで聞いていただき、嬉しく存じます。お詫びとともに、厚く御礼申し上げます。1年間にわたり本講座にお付き合いをいただき、本当にありがとうございました。）

（本稿は、館長講座での配布資料に補足したものです。）